

オーストラリア研修旅行の報告

—参加学生の感想を中心に—

植 草 一 世

A report of study trip in Australia and a summary

Kazuyo Uekusa

I はじめに

植草学園短期大学は、学生に他国の福祉理解と、そしてそれによってより日本の福祉事情を知って欲しいという願いのもとに海外研修旅行を企画し、第1回目をオーストラリアの地に実行する運びとなった。私は、2001年3月10日～16日にかけての7日間、植草学園短期大学、第1回海外研修旅行の引率という立場で参加した。この研修は、地域介護福祉専攻の学生は介護施設、老人施設を、児童障害福祉専攻の学生は養護施設、保育園の訪問・見学・参加ができ、また、「オーストラリアの福祉」を中心にTAFE（州の医療・福祉系職業訓練校）等で講義を受けることが出来た。

II 目的

実際に見学・参加をした施設や講義を受けた内容について、参加学生に質問紙調査や報告集を作成した。その質問紙調査や報告集そして実際に講義を受けた資料、オーストラリアの教育・福祉に関してレポートする。また、施設側とのスムーズな交流の手段としておみやげを準備した。おみやげについても以上のような内容で調査したので紹介する。そして、この研修を通して、多くの資料をいただくことが出来た。その資料をもとに「オーストラリアの幼児教育事情」としてチャイルドケア施設の種類と内容をまとめて報告する。

III 調査方法

- 1, 対 象：研修旅行参加者：地域介護福祉専攻1年生9人。児童障害福祉専攻1年生22人。2年生3人。計34人。
- 2, 調査期日：2001年3月10日～16日
- 3, 調査方法：質問紙による自由筆記と質問紙調査・報告集
- 4, 調査内容：訪問施設についてそしておみやげについて質問紙により、良かったのかどうかを4段階（良い・やや良い・やや悪い・悪い）にグラフに表し、上位の学生の意見をまとめる。また、施設の内容を自由筆記にしたものをまとめる。
- 5, 質問紙記入と回収について。この調査は、研修旅行中質問用紙を配布し、3月16日 研修最終日（日本到着）まで回収した。回収率は100%である。

IV 報告

1. 施設見学

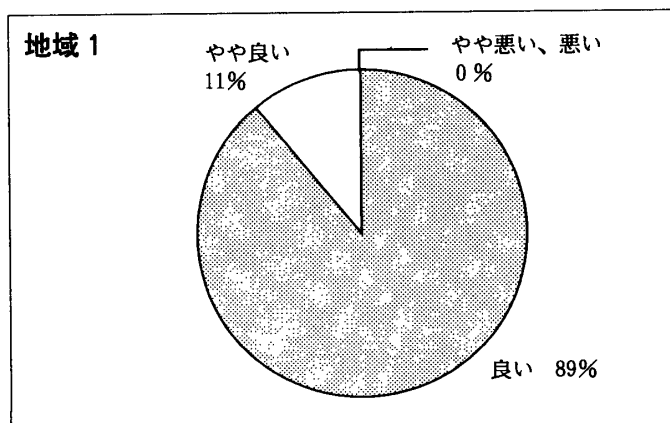
1) 地域介護福祉専攻学生の報告 (*印: 報告集より一部引用)

① Wyllie Lodge Nursing Home (参加学生 9 名)

* 「Wyllie Lodge Nursing Home を訪問して」

Nursing Homeとは、簡単に言えば日本の特別養護老人ホームと同じ部類に入ります。オーストラリアに来て初めての施設見学でした。家はどう見ても何処にでもある住居(家屋)と変わりませんでした。Nursing Homeはどう見ても住宅街にある家でした。玄関を出てから門までの間は、痴呆で徘徊のある人が出て来ても良い様になっていました。門にはパスワードがあり、ある数字(四桁)を入力しないと開かないようになっていました。この施設に住む方には気付かないところで、工夫がされていました。この施設の部屋は全部で15室有り、4人部屋・3人部屋・2人部屋・1人部屋の四種類の部屋が有りました。中でも2人部屋が多く有りました。2人部屋が多いのは、人生の多くを2人(夫婦)で過ごす事が多いからだそうです。利用者さんの部屋の左上には名前が書かれており、名前の後にAやW等のラベルが貼られていました。施設長さんの話によると、その利用者の移動能力が分かるようになっているそうです。A=自分で移動(歩行)可能 W=車椅子で移動(歩行)可能 E=イージースタンド(*)を使って移動(歩行)可能 *椅子から立ち上がる時の補助器具の事だそうです。M=メカニカルリフター(*)を使って移動(歩行)可能 *車椅子から立ち上がり、ベンチなどに座るときに使われる補助器具。1.2=その利用者を介護するのに、必要な職員の人数。内装は、水色の壁に深緑色の手すりでした。ぱっと見ると手すりが見ずらいので聞いて見たら、利用者の目からすればこの色が一番見やすいのだと言っていました。利用者の事を良く考えているなあと思いました。食事は、利用者の気持ち(その日の気分)を尊重して、Dining Room(食堂)か個室(自分自身の部屋)のどちらかを選ぶことが出来るそうです。そして、Kirochinet(キロチネット)と呼ばれる、利用者が自分で簡単な料理を作れるキッチンがありました。また、Dining Roomではコンサートを行うこともあるそうです。

(参加者全員の感想)



・オーストラリアの高齢者福祉について介護施設とサービスについて学習した。一般の住宅を改造した居室で利用者はとてもおだやかな表情で過ごされていた。
・内装もよく考えられていた。
・古い家具や壁の色の調和。きれいな中庭。
・特殊なおもなかつた。
・個人のニーズを大切にしていると思った。
・介護者の腰を痛めないよう

にリフトがあった。・TAFEの講義は密度の濃い内容でオーストラリア人のライフスタイルも理解できた。修了証書をいただいて印象に残る1日だった。

② Eastern Districts Private Nursing Home (参加学生9名)

* 「オーストラリア・メルボルンにあるイースタン・ディストリクス・プライベートナーシングホームの見学で学んだことについて」

オーストラリアで高齢者が入所する施設にはホステルとナーシングホームという2種類があります。今回はそのうちナーシングホーム、日本でいうと特別養護老人ホームのほうを見学しました。ホステルよりもナーシングホームのほうが介護度の高い方々が入所しているそうです。そして入所の理由はさまざまですが失禁が始まると、家族の方々の手におえなくなって入所を希望するようになる(本人も家族も)事が多いのだそうです。

今回私が見学したイースタン・ディストリクス・プライベートナーシングホームは、ユダヤ人の男性が設立した私立の老人ホームで、入所者は全部で60名、60床のナーシングホームです。ケアレベルの高い入所者対象のホームで痴呆の方がたくさんいらっしゃるそうです。痴呆専用ベッドも11床用意されています。

ここでは1年に1回アセスメントをします。ケアプランは1ヶ月に1回見直しをします。ケアプランを作るのはすべてのスタッフで、具体的にいうと医師、PT、OT、ST、栄養士、介護福祉士、正看護婦、准看護婦、事務員、清掃員まで含むすべての人で作成するそうです。

オーストラリア・ビクトリア州では1996年に高齢者法が改正され、すべてのホステル・ナーシングホームは政府の認定を受けなければならないことになりました。2001年1月、全施設のうち90%以上が政府によって認定されました。認定には、管理介護内容、活動内容、法律・条例基準(合法性)の四分野があり44項目のチェックがあります。

今回、このホームを見学して、又、他のホームに行ってみて印象に残ったのは施設や各部屋の色の鮮やかさでした。日本では病院の様に白一色の老人ホームが多いのに、オーストラリアではピンク、グリーン、ブルー、アイボリーといった色で床や壁が彩られ、部屋の中もベッドカバーが各人でそれぞれに違う柄だったりして、暖かさを感じました。生活する場を楽しく、住みよくととの配慮があちこちに感じられて、日本の老人ホームもこんな風だったらもっと楽しいだろうなと思いました。

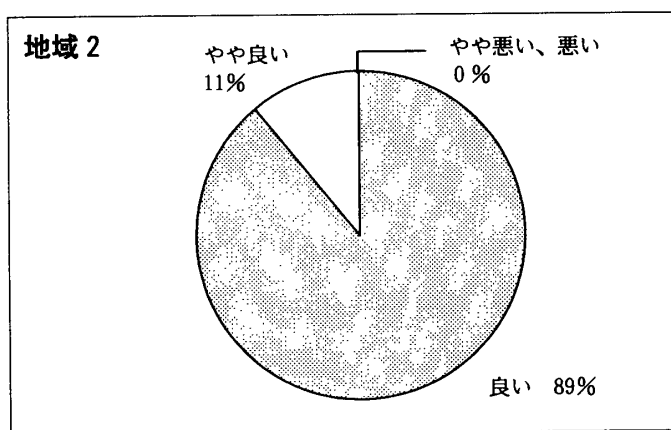
* 「Eastern Districts Private Nursing homeを訪問して」

Nursing Homeは、日本でいう特別養護老人ホームの施設を表しています。

メルボルンに来て最初のNursing Homeです(と言っても、シドニー最終日前日のNursing Homeとはあまり変わりません)。このNursing Homeは私立で、民間の企業が行っているそうです。そのため、シドニーのNursing Homeで聞いた内容とは微妙なところで違いがあります。私立と公立のNursing Homeの大きな違いは、お金です。公立のNursing Homeは6ヶ月契約で8万ドルを

入所時に払うそうです。しかし、資産（家は含まないが、家を2・3軒持っている人は1軒以外は全て入る）が2万5千オーストラリアドル以下（夫婦の場合、5万2千オーストラリアドル以下）の人は支払わなくて良いそうです。又、先に払った8万オーストラリアドルは、違う施設等へ行く為に途中で退所する人には返金されるそうです。私立のNursing Homeは、その州や場所によって様々ですが、この施設の場合は、頭金が部屋によってピンからキリまであり、部屋の家賃、マニキュアやドレッサー等の個人用品も自分自身が払う事になっています。又、滞在期限は3ヶ月だそうです。この施設には利用者数が60名、STAFF（所長以外全員パート）数が85名います。介護度が重度の人が入居しています。痴呆症の人が幾分多くいます。部屋は1人部屋か2人部屋のどちらかしかなく、2階は全て1人部屋で痴呆を持つ人達が住んでいます。1階では2人部屋が多いそうです。今まで夫婦2人で過ごして来た為、施設に入所してすぐに個室では、寂しさを募らせてしまうから2人部屋が多いそうです。入所時はアセスメントから始まります。家族や医師等を交えながら、その利用者の年代、背景、宗教（キリスト教が約70%だそうです）、生活歴などいろんな事から情報を収集し、その人のニーズを把握して、その事を踏まえた上でケアプランを立てるそうです。アセスメントは毎月1回、ケアプランは1月1回の割合で見直しをしています。アセスメントとケアプランの見直しには、全ての職員（OT、PT、ST、正看、準看、栄養士、介護士、清掃員、事務員などなど）が参加して、持ち場から見た意見を出し合う形をとっています。

（参加者全員の感想）



- ・利用者も生き生きとした印象だった。
- ・比較的裕福な方たちの入所する施設と言うことだったが、施設と言うより自宅で生活するようなイメージだった。
- ・車椅子でも自由に外にでていけるような雰囲気ですばらしかった。
- ・施設で働く人たちの立場も大切にしていることがわかった。
- ・移動リフト・洗濯機等介護者の補助具見学した。

利用者のニーズに合わせ、食事の場所も本人に選択させていた。

- ・ほとんど機械で老人を動かしていた。
- ・施設長さんが親切に質問に答えてくれた。
- ・質問する時間がたっぷりあって良かった。

③ Bundoora Extended Care Centre Aged Care Day Clinic（参加学生9名）

* 「3月14日水曜日、私達はBundoora Extended Care Centreを訪問しました」

＜概要・特徴＞－デイセンターとナーシングホームが同じ敷地内にあります。－デイセンターでは高齢者や、年齢にかかわらず障害を持つ人々とその人たちを介護する人々のサポートにあたります。－ナーシングホームは30床で、各部屋は個室です（バスルームは共同）。－入所している人たちに楽しんでもらえるようなさまざまなアクティビティを提供しています。

〈事業内容〉—デイケアサービスの提供。—在宅介護を望む人たちへの介護プログラムの提供。

—食事の宅配サービス、掃除・洗濯・買い物など日常生活のお手伝い。

〈施設のサービスと感想〉 施設に到着後、職員の方達の歓迎を受けました。一日のタイムテーブルを渡され、その流れを確認しました。

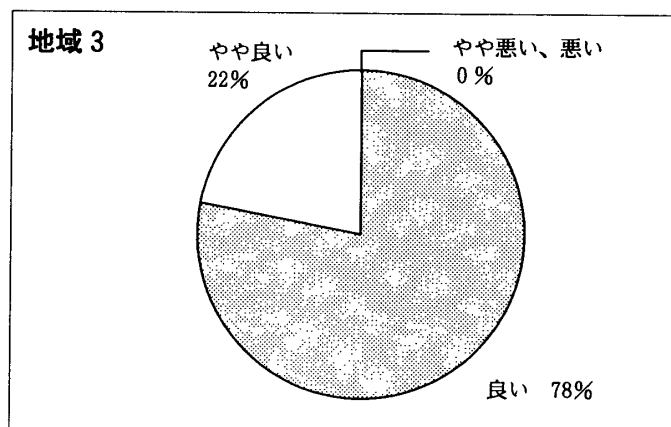
9：30—Bundoora Extended Care Centreでの研修の説明 9：45—10：15施設で行われているサービスについて 10：15—10：35モーニングティー 10：35—11：20デイサービスについての説明 11：20—12：00コーディネイティッドケアについて 12：00—12：45昼食

*施設は大きく、広い敷地内にはいくつもの施設があります。利用者に対して、健康と福祉関係のサービスを提供しています。サービス地区はメルボルン北東部にまでおよびビクトリア州の退役軍人、戦争未亡人も対象者に含まれます。

*デイセンターでは、1日に約30名がサービスを受けます。また、この人達は週1、2回利用し、1日平均6時間です。こちらでは朝、シャワーをサポートするサービスはありますが、浴槽にかかるような入浴サービスはありません。午前、午後のティータイムとランチの提供があります。カーペットポーリングやビンゴ、ハンドクラフト、木工等、様々なアクティビティーも用意されています。

*私達は、利用者の方がモーニングティーの間、一緒に折り紙をして楽しむことができました。用意したお土産を渡すと、とても喜んでくださったので苦労して作った甲斐がありました。また、もう少し英会話ができればもっと意思の疎通がはかれたのではないかと思います。言葉はわからないながらも、表情、身振り等でコミュニケーションがとれたのではないかと思います。私は日本でデイサービスのボランティアをしたりしましたが、一人で孤立してしまう人も見ました。しかし、こちらでは皆、同じテーブルに集い、まとまりのある印象を受けました。短い時間でしたが、貴重な経験をすることができました。

(参加者全員の感想)



・お年寄りとの交流が深められた。・集中して講義が行われ、より専門的なオーストラリアの福祉が学べた。・熱心さと、もてなしにありがたいと思った。・折り紙を渡すだけでなく、一緒に折れて楽しかった。

④ Bundoora Extended Care Centre Nursing Home (参加学生 9名)

* 「Bundoora Extended Care Centre訪問」

12:45-2:00 Liz Hamilton リザ・ハミルトンさんによる講義の内容 (Community Services)
コミュニティ・サービス：自宅で安全に自活した生活ができるようなサービスを提供している。コミュニティプログラムの導入の概要を説明する。

(Information Advisory Centre) インフォメーション・アドバイザーセンター

このセンターでは高齢者にとって、どういったケアが一番大切かを考え情報提供を行っている。また日常生活を補助する用具・器具も展示している。これらの用具、器具は自分のニーズに応じたものを選んで提供している。

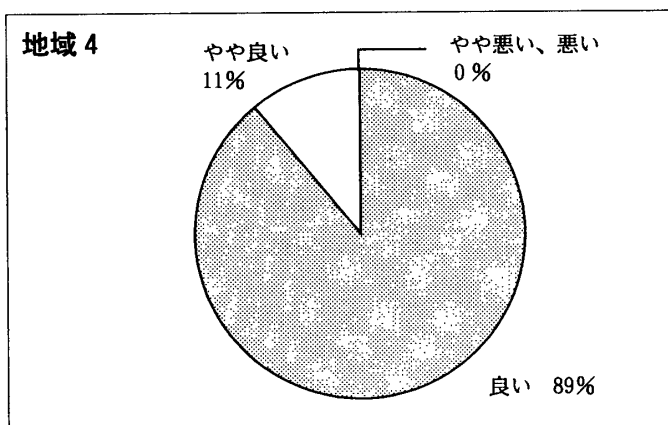
2:00-3:00 Jenny Palmer ジェニー・パールマーさんによる講義の内容 当センターの新しいサービスの一環として、小規模だが、転倒防止クリニック、頭痛管理クリニック・メモリーサービスとしての記憶の低下を予防するクリニックを1週間に1回ぐらいの割合で、開いている。

3:00-3:20 Afternoon Tea 休憩を含んでセルフサービスにて飲茶とクッキー、アップルケーキなどをいただいた後、着席し質疑応答が行われた。

3:20-4:20 Ian Brand Nursing Home ナーシングホームを見学した。ホームでは、介護度の高い人が入所し住んでいる人が楽しんでもらえるようなさまざまなアクティビティを提供している。入所者の一人(女性)から見学の許可が得られた。クラフトを趣味とする作品が部屋中飾ってあり、大変感動し記念写真も撮ることができた。ホームの構造は各部屋が個室でトイレとバスルームは共有。どの部屋からも中庭が見渡せ入所者の方はとても穏やかな表情で静かにひとときをすごしてるかのようなようだった。

4:20-4:30 最後にボランティアの方々の協力によりつくられ記念碑の建つメモリアルガーデン(1977. 3. 22)に案内された。バラの花によるアーチがありとても心安らぐ落ち着いた庭であった。これで研修が最終となり最後に今日一日私たち学生のために貴重な講義と手厚いもてなしに感謝の気持ちをこめ、リーダーがあいさつをした。

(参加者全員の感想)



・利用者第一のサービスの提供のされ方が徹底されていると思った。・声を掛けたり折り紙を渡すと笑顔で接してくれてうれしかった。・公立のナーシングホーム訪問でしたが、様々なアクティビティーが用意されていたり、環境が整えられていた。・講義も充実していてこの施設のあり方にスケールの大きさを感じた。アフターケアについて

でも万全の対策がなされていた。・交流の場の提供、ナーシングホームの見学、利用者の方々の個別見学等感謝する。・入所の方たち等片言ながら話ができる。

2) 児童障害福祉専攻学生の報告 (*印: 報告集より一部引用)

① Spastic Centre, Brookvale (参加学生25名)

* 「Spastic Centre Brookvale ①」

“Spastic Centre”では、日本の障害者施設のように作業はありません。ここでは教育的、医療的なことなど様々なことをしています。

今回見学させていただいた、「コンピューター」「美術」「体育」は、それぞれ特徴のあるすばらしいものでした。コンピューターは、みんなが集まる所からちょっと離れた部屋にあります。中には5～6台くらいあって、頭で打つキーボードや足を使うもの、手が震えてキーボードが正確に打てない人の為のキーボードなどがたくさんありました。

コンピューターの部屋のとなりに、美術の道具がたくさんありました。にぎりやすいようになっているスタンプや鈴、音の出るおもちゃなどがあり、壁には彼らが書いた絵がはってありました。

そして体育は、車イスのままでもできる競技、シドニーパラリンピックでも行われている

“ボッチャー”を見せていただきました。ボッチャーとは補助者と2人1組で、補助者は選手の方しか見てはいけなく、後ろを見てしまうと失格になってしまうので、選手と補助者の信頼関係が重要となるものです。実際に競技を見て本当に信頼しあっているのだなぁと思いました。

この3つには共通点がありました。それは、その人のニーズに合わせたものばかりだということです。何か1つにかたよらず、「この人の場合は…」といったように1人ひとりをととても尊重し、すごくいい環境だと思いました。1人ひとりを尊重しているため、私たちが彼らをだっこすることは許されてなく、クレーンを使わなければならないが、それをすることで、補助者に対する負担というも減っていて、日本との考え方の違いを見せつけられた感じがしました。

またボッチャーでシドニーパラリンピックに出場した方が、このセンターに何人かいると聞き、私も頑張ろうという気持ちになりました。今回、オーストラリアに行けてとても良かったです。色々な事を学べ、そして見学出来たこと、とてもうれしく思います。また参加したいと思いました。

* 「Spastic Centre Brookvale ②」

〔センターについて〕 脳性マヒの子どもを持つ親たちによる互助会は設立されてから50年が経過し、今日ではオーストラリアの中で最も大きな慈善事業となりました。全体で50～60の施設があり、職員は約1000人です。財源は政府からで、運営は親達です。

事業内容は、新生児や障害児の家族への支援などです。学校や仕事に対する支援の他、引退してからのサービスも行っています。地方に住んでいる人に対しては、こちらから出向き、支援をしています。また、ビジネスも行っています。メンバー（利用者）の発言が、運営の鍵となっています。

大切なことは、1人として同じ人はいないということです。みんな違ったニーズがあります。そして、障害があっても、心は私たちと同じなのです。また、このセンターには知的障害のメンバーもいます。自分で自分のことを決定するのが困難な人には、その人をよく知り、訓練を受けた権利

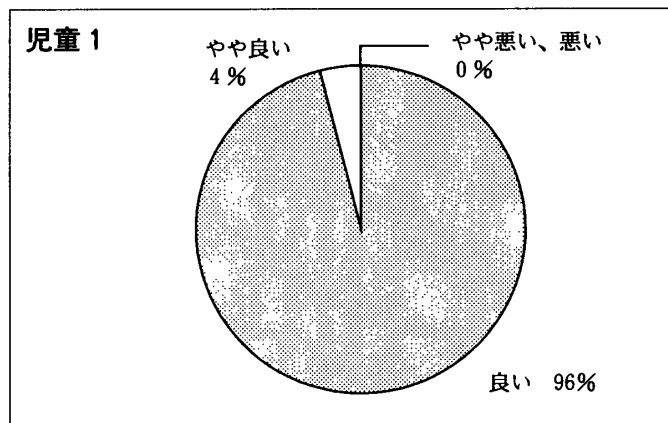
擁護人をつけます。〔脳性マヒについて〕 出産時、又はすぐ後の脳（運動、姿勢をコントロールする部分）の酸欠によって起こります。他の原因には、トラウマ（外傷）や感染などがありますが、理由が分からない場合もあります。障害が生じる率は常に上下しますが、約400人に1人の割合で起き、オーストラリアでは8時間に1人の割合で脳性マヒの子どもが産まれている事になります。脳性マヒは感染する病気ではありません。治療法は発見されておらず、言語、理学療法などによるQOL（生活の質）の向上が第一で、早期介入が大切です。

〔実際の活動について〕 ・健康、レクリエーション 医者の予約、療法、映画、ボーリング、外での昼食など希望に応じて。 ・センター内での活動 音楽、料理、アート・教育

コンピュータのプログラム（Webデザインなどを学んでいる人もいる） ・その他

いろいろな物を書いて発行、様々な委員会（メンバーが職員のサポートを受けながらサービスについて話し合う）。外泊、アドベンチャーを体験する（特別な補助具を使い、スリルを味わう）など。 ※作業はしていません。仕事をしている人もいますが、それに対しての情報はありません。 ※一番力を入れていることは、地域社会に参加する事です。地域の人に知ってもらうために、外食などをして外に出るようにしています。

（参加者全員の感想）



・いろいろな遊びや、コンピュータの紹介をしてもらったり、とても楽しかった。 ・施設が明るく、スタッフや利用者の方の雰囲気良かった。 ・明るく受け入れてもらい、質問にも丁寧に答えていただいた。 ・障害者が中心という感じがした。 ・明るい場所で、障害者の人も居心地がよいと感じた。 ・障害にあった機械などを一つ

一つ説明してくれた。 ・初日で大変緊張したが、時節の人の対応が良かったのですぐにほぐれた。 ・折り紙も一緒に折ってくれた。 ・交流がもてた。おみやげの宛大変気に入ってもらえた。 ・重苦しい空気がなくて良かった。 ・一人一人の障害を丁寧に説明してくれた。時間を掛けて見学ができた。 ・障害があっても全く普通のようなだった。 ・修了証書をもらってうれしかった。

② Glenroy Specialist School（参加学生25名）

* 「Glenroy Specialist School」

この施設は、身体・健康上に問題のある5～18歳の児童を対象とした学校で、主に理学療法を行っている。職員は、PT・OTなどで構成されている。

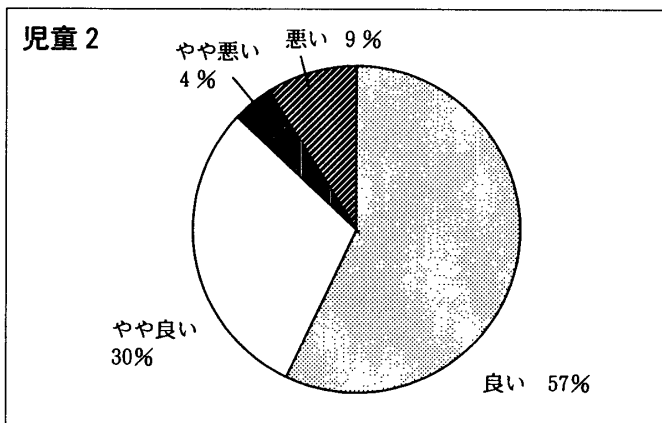
職員の配属人数は障害のない児童の場合21名に1人の先生を置くことが義務づけられているが、4・5名に1人の先生を置くことが理想とされている。この学校では、特別予算で27名の補助員を配置

し、現在、1クラス5～7の生徒に対し1名の先生という少人数制クラスで対応している。

生徒は、コンピューター・美術・スイミング・乗馬など一人ひとりのニーズに対応した教育計画にもとづいて活動している。活動は一对一の付き合いを大切にするため、多くのボランティアによる協力が必要となっている。これらのボランティアは、一般募集を行い校長の考えのもとで面接を行い、生徒の親、近隣に住む人、障害ケアの職種を望む人々によって構成されている。この教育計画では、様々なテクノロジーを使い、五感や障害に働きかけ生徒の自立、コミュニケーションの援助を目標としている。

一日の活動の流れは、8時半～9時バス登校・HR、9時～クラス活動（Education Programme）12時～昼食（弁当持参）～3時活動、3時下校となる。登下校に使用されるバスは合計13台あり、23名の先生がそれぞれにわかれて添乗する。

（参加者全員の意見）



・大きな施設だと思った。日本との違いを感じた。・障害児に対するサービスがとても充実しているように感じた。・児童がとても過ごしやすいそうだった。・様々な機器がそろっていた。・センサーで音の機械があって、興味深かった。・日本との違いや、外国の子ども達の様子を身近に見ることができた。・ハーブの庭が興味深かった。

た。・グループで分かれたとき、一部通訳がいなくて困った。・私たちの態度が悪かった。

③ Park Street Childcare Centre（参加学生 午前12+午後13名）

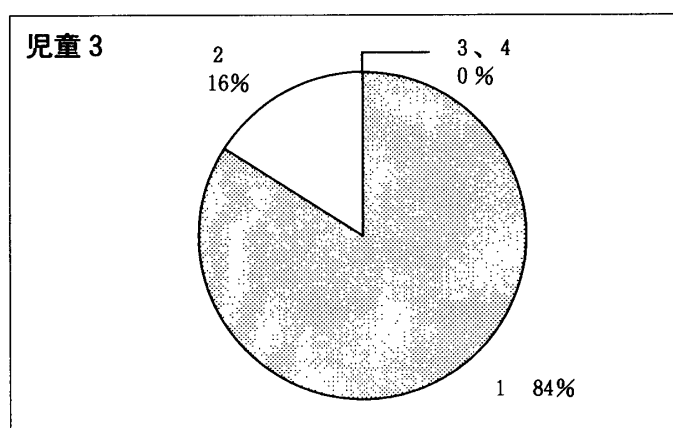
* 「3月14日（水）Park Street Child Care Centre」

このセンターは日本でいう保育園と幼稚園がひとつになったようなセンターです。外観はセンターというよりは、普通の一般的な家のように子供たちは自分の家で活動しているようでした。

子供たちは全部で35人。国籍や人種、宗教など全く関係なく通っています。総人数では72家族82人の子供たちが通っています。クラス分けは年齢ごとに4つのクラスの分かれて活動しています。園庭は、大きいのと小さいのが1つずつありました。大きい園庭には、砂場や鉄棒、木の家などがありました。木の家は、子供たちがそこでままごとなどで、家庭生活を学べるようにという意味もあるそうです。木の家というのは、子供たちの興味などを引く、いいものだと思います。もう1つの小さい園庭は、少し年令の大きい子供たちの庭でした。少し細かい遊びもできるような感じでした。楽器や小さい登り棒のようなものもありました。私が入ったクラスは18ヶ月から2歳児のクラスでした。教室の中には色々なおもちゃがありました。お医者さんごっこセットみたいなものもあり、子供たちが白衣を着て本格的に遊んでいました。絵本コーナーもあり、好きな絵本を見てい

ました。私が「これはいいな」と思ったのは子供たちの指先の機能を発達させるためのおもちゃです。下にちいさなお皿みたいなものを置きそこからリボンをつけ、リボンの先に子供がそれを持ちやすくするためにかたいペンのようなものをつけ、マカロニやカラフルな紙の入れ物などを通していくものです。日本ではあまり見かけないものだったので、取り入れたら面白いかなと思いました。月に1度、子供たち全員で「アボリジニー」について学ぶ機会があります。アボリジニーの人がセンターに来て、お話をしてくれます。ただ話をするだけではなく、写真を見せたりしていました。コディキーという大きな笛のようなものも実際に吹いてくれたりしました。コディキーは男の人だけが吹けるそうです。鳥のマネをしたダンスなど子供たちが踊っていました。子供たちはみんな話をしっかり聞いていました。このように、他の人種の文化を知る機会を作ってくれるのは、すごいと思いました。

(参加者全員の感想)



・外国の子ども達と初めて遊べて、かわいい姿を見ることができて楽しく過ごすことができた。ふれあいの時間がもてた。フレンドリーで交流がもてた。・折り紙で遊べた。ぴよんぴよんガエルと風船が人気があった。・家庭的な雰囲気良かった。小さな部屋と小さな庭だった。・きれいな家だった。・少人数制だった。

・ゆったりとした時間の中で保育がされていた。・子ども達がのびのびしていると思った。しっかりしていると思った。・庭に敷き詰めチップや開けた室内など日本の幼稚園とは違う施設をみた。・アボリジニの話が聞けて、貴重な体験だった。日常用品などみられた。・言葉が通じなくても伝わるものがあった。最後にキスをされた。・言葉のコミュニケーションがとれなくて残念だった。動物の鳴き声や、車の音などの音で遊んだ。英語でお礼が言えなくて残念だった。・保育所は自分にとって身近な施設なので日本との違いがわかり、質問もしやすかった。

④ Early Intervention Centre Glenroy (参加学生 6 + 5 名)

* 『Yooralla』 ☆Early Intervention Centre Glenroy☆

GlenroyとBlackburnの2カ所の施設にわかれている。直訳すれば「早期治療センター」で、日本では療育センターと言われている。生まれつき、あるいは後天的に身体に障害のある子どものための通園施設。また、Yoorallaでは、病気、高齢のため体が不自由な人々のための施設もある。

特徴 ・Yoorallaの運営する、障害を持つ人々をサポートする非営利組織。・自分への自信と外の世界に興味を持ち、しっかりした視野を持てるように指導する。・専門家がチームを組み各人に適したプログラムを提供している。・学ぶことは楽しいことであること、すべての子ども

に個性があることをモットーにしている。・安全でアクセスしやすい校舎と遊び場がある。

★施設の概要★0歳から就学前の子どもで、主に肢体不自由児が通っている。職員は、物理、作業、言語療法士とセラピスト、2人の補助員で、幼児1人に対する対応力は高い。また、3つのプログラムが構成され、クラス分けされている。

- 1, アーリーインタベション (23名)
- 2, プレイグループ (0～3歳児、4名)
- 3, 自閉症児プログラム (6名×2グループ)

週2回の通園(プレイグループは週1回)で、通学方法はスクールバスで自宅まで迎えに来てもらい通うことができる。親と一緒になくても良い。普通の幼稚園に通いながら来ている子もいて、どちらを優先に考えているかは両親の自由。また、障害の重い子が幼稚園に通っている場合は、その幼稚園にセラピストが定期的に通うこともある。

・通っている子どもの家庭について：ここに通う子どもは英語が第二言語の子どももいる(つまり他文化の子ども)。このような子ども、親については、施設側が責任を持ってその文化について理解してその家庭の生活に合わせる必要がある。

・通うまでの経路：主治医、産婦人科、相談機関、口コミなどによる紹介。

・経営について：政府からの援助金はなく、寄付金を集めたりして経営している。利用者は一年で4万円位を払う。

＊＊施設内の様子＊＊普通の幼稚園と同じようなつくりで、教室の中は絵を描く場所、本棚と本を読むソファ、段ボールなどでできた遊具、おもちゃなどの訓練のための遊具やおもちゃがたくさんおいてあり、それらはすぐに遊べるように準備されている。また、教室での訓練の様子はマジックミラーで隣にある部屋から見学できる。教室の壁は、赤と青で明るく、おもちゃなどにも外国らしい色がたくさん使われている。教室からそのまま外に出られるようになっていて、外に出るときは必ず帽子をかぶらせる。外には白い布で作った屋根がつけられている。オーストラリアは紫外線が日本の5倍位強いので、屋根をつけるのは法律で定められている。また、土ではなく芝が生えている。日本のように運動場のように平らではなく、山のようになっている。遊具は日本と同じで、アスレチック、滑り台、ブランコ、砂場などがある。倉庫の中にはボールや三輪車などがしまっており、三輪車に乗るときは必ずヘルメットを着用する(オーストラリアでは、自転車に乗るときにヘルメットを着用する)。

＊「Early Intervention Centre Glenroy」

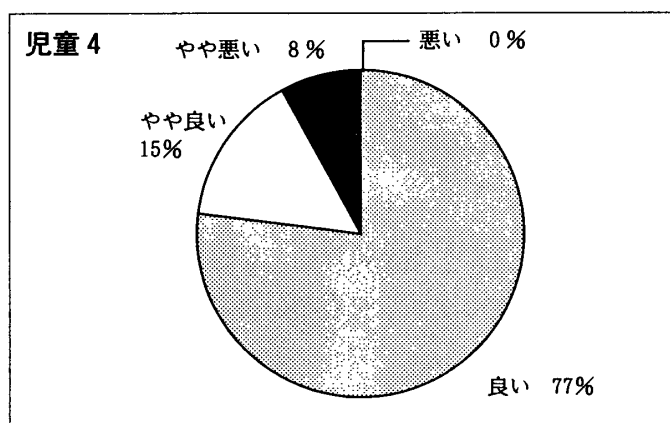
このセンターは「療育センター」であるということでした。援助金というものは基本的になく、一般からの援助金(寄付金)によって運営をしているそうです。対象児童は3歳～6歳を対象としており、見学に行った時には、生徒(通園児童)は全体で38名ということでした。個人個人によって様々な障害を持っているということです。当日は、この中の3名が通園していました。専門教育

を主としており、そのためスタッフもPTをはじめST・OT・ヘルパーなどが設置されていました。ここでは、3つのプログラムが実施されていて

1、Early Intervention Centre 2、0～3歳 プレイ グループ（週1回）

3：自閉症：という風に分けられています。（重複あり）登校時間については、午前か午後といった感じで登校してきます。基本的には午後からの登校が多いということでした。（通園のためのバスあり）オーストラリアは多文化なため、言葉が違うというわけではなく、いろいろな面でコミュニケーションを大切にしているそうです。また、通園してくる児童は週2回・2時間半が基本になっています。障害者の親がセンターをどのようにして知るのか？という質問については主に医者などの紹介によって知るということでした。

（参加者全員の感想）



・スタッフの人数が子どもの人数より多く1対1保育していて驚いた。・教室が広く、遊具もたくさんあった。・初めて障害のある子どもと遊んで、難しかった。笑ってくれてうれしかった。・日本の歌を楽しく興味深く聴いてくれた。質問にたくさん答えてくれた。・スノーズラン療法を体験でき感動した。

・先生達がとても明るく私たちにも話しかけてくれた。子ども達とも関わる事ができた。

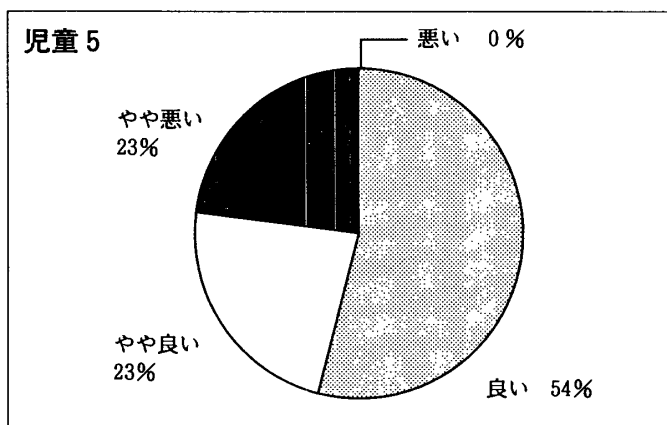
⑤ Early Intervention Centre Blackburn South（参加学生7+7）

* 「Early Intervention Centre Blackburn Southについて！！」

＜概要・特徴＞1歳から4歳までの身体障害者が週2回通う施設。週2回なので、地域の幼稚園に通いながらここに通う子が多い（1、2歳児は親同伴）。人数は1歳が7人、2歳が7人、3歳が10人、4歳が10人、の計34人。専門家がチームを組み各人に適したプログラムを提供している（私たちが見学に行ったとき、言語治療士の勉強をしている学生さんが実習に来ていた）。先生の他にも、理学療法士など、さまざまな専門家がサポートしている。

＜授業内容＞（2歳児）各専門家や先生、親が皆で目標を決め、1年かけてやっていく。子どもは1人1人違うので、その子にあわせた目標を考える。たとえば、立っていき練習から入り、20秒、30秒と増やしていき、集中できるようにしていくという目標を立てるなど、3ヶ月に一回どれ位目標が達成されているかを見て、持続するか高くするか考え直していく。自分で選ぶ、決められる、などを目標にもする。手話より絵などを使い、コミュニケーションを使うようにしている。

(参加者全員の感想)



- ・優しく親切に質問に答えてくれた。
- ・見学と質問はできたが、子ども達とは遊べなかった。
- ・子ども達を遠くから見るだけで残念だった。
- ・個人のニーズに合わせた接し方を教えてもらった。

2. おみやげ

* 「訪問みやげ担当」

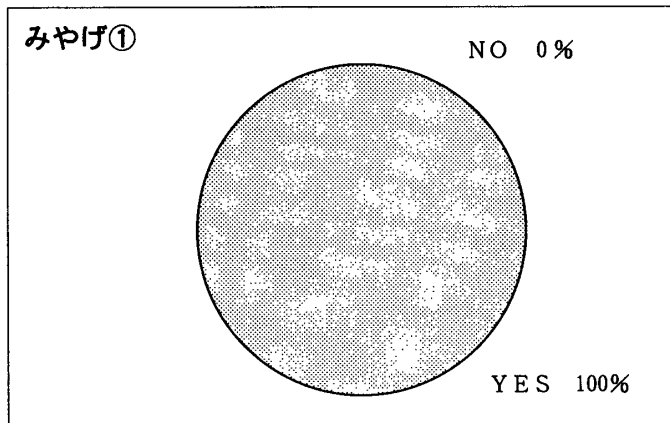
色紙を四辺形に切って、その中に10個の正三角形をつかって、端と端をのりで付けて作り、切手やシールなどをかわいく模様をつける六角返しや、飛び出すカードや折り紙で動物などを折って個人個人で持っていきました。また、訪問土産の係りの人は、千葉大附属養護学校の方が作った本藍染めを持っていきました。

オーストラリアに着いてからは、毎晩行う代表者会議に出席して、一日の反省や明日の一日の流れを聞き、小さく分けてあるグループのリーダーとして、みんなに伝言をしたりしました。また、施設訪問では、英語で簡単な挨拶をしたり、代表としてお土産を施設の方に渡しました。

初めての研修旅行で、全員がどうなるか不安や期待を持っていた状態だったので、お土産をいつ渡すのかななどを、私自身出発する前からとても悩んでいました。しかし、思ったよりも、施設の方々が明るく、とても優しくかったので、変な緊張をする事無く、軽く英語で挨拶することが出来ました。また、折り紙もとても喜んでくれて、ピョンピョン蛙や鶴で子ども達が楽しそうに遊んでいました。本藍染めもとても珍しくて美しいものだったので喜んでくれていました。また、英語の歌を皆で披露した後、日本語の歌「手をたたきましょう」を踊りながら歌いました。一緒に真似して踊ってくれる子や、楽しくて興奮してしまう子がいました。英語で話すことが苦手でも、歌一つで心が一つになれるのだと感じました。

プレゼントを持っていくことで、コミュニケーションをとるきっかけを作ることが出来たので、訪問土産の内容はとてもよかったと思います。

1) 手作りのおみやげを持っていったか？

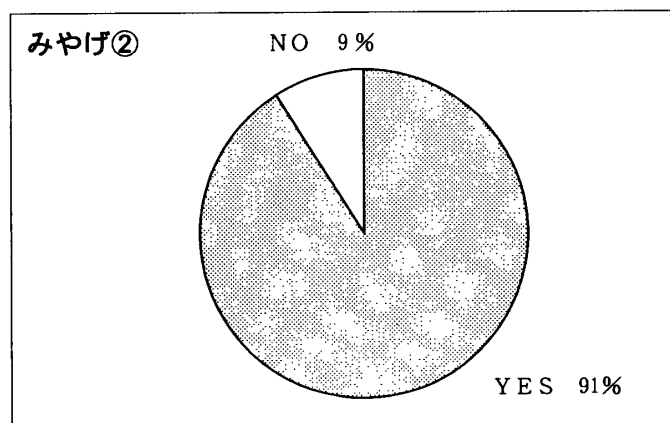


2)、おみやげについて

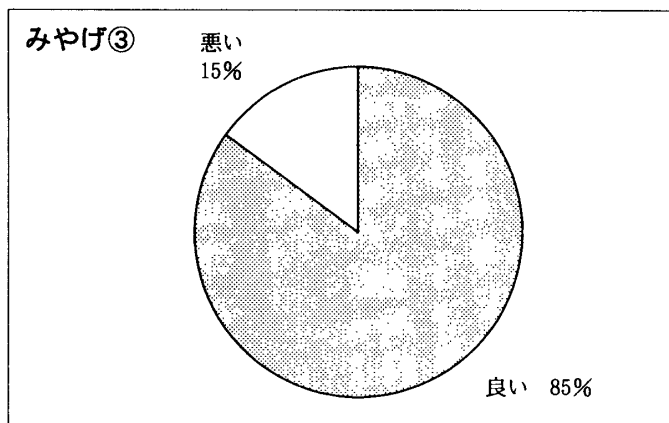
① 何を持っていったか？

六角返し：全員 折り紙：鳥（鶴・鴨・インコ・鳩）・花（朝顔・あやめ・バラ・チューリップ・桃）・ぴよんぴよんガエル・コアラ・せみ・猫・犬・ペンギン・鯨・うさぎ・カタツムリ・亀・魚・金魚・狐・カンガルー・ライオン・兜・小箱・ワンピース・手裏剣・型抜き・奴さん・袴・だまし船・風船・カメラ・コマ・ロケット・家・コップ・お雛様・鯉のぼり・ヨット・風車・ピカチュウ・メンコ・飛行機 その他：和紙人形・紙風船・日本的なカード・手作りカード・状さし・あやとり・ヨーヨー

② 渡せたか？



③ おみやげについての相手の反応はどうだったか？また一緒に遊べたか？



- ・一緒に兜を作った。大変喜んでもらえた。
- ・折り紙の量に驚くとともに、喜んでもらえた。
- ・六角返しに驚いてくれて、ほめてくれた。六角返しに貼った切手が喜んでもらえた。
- ・老人が楽しそうに折り紙を折ってくれたのでうれしかった。とても興味を持ってくれた。
- ・思った以上の反応があっただけうれしかった。

た。笑顔を見せてくれた。・手裏剣とインコが喜ばれた。手裏剣は「忍者」と言うのとわかってくれた。・花や鶴・風船はとても喜んでくれた。一緒に遊ぶことができるので良いおみやげだった。・ぴょんぴょんガエルが子ども達に好評だった。・きらきら光る折り紙に興味を示してくれた。・障害の重い人は無反応だった。折り紙をどうやって折ったらいいのかわからなかったらしく反応が薄かった。目の悪い人には、わかってもらえなかった。みんなで遊べるものが良かった。・六画返しは老人には難しい。

V オーストラリアの教育・福祉事情について

1) TAFEでの講義

TAFE（ターフ・オーストラリア州立専門学校）ノーザン・シドニー・インスティテュートは、オーストラリア最大の職業訓練教育機関である。この機関では年間1000以上のコースを45000人以上の現地学生や海外から野学生に提供している。また、過去100年にわたって、各産業や各コミュニティが必要とする教育や訓練を提供している。

* TAFEでの講義

TAFE（州の医療・福祉系職業訓練校）での講義の中で、次のようなことを聴くことが出来た。

- ① 教育形態：初等、中等、高等訓練や修業、特別教育などがある。6歳から16歳までが義務教育期間であり、6歳が幼稚園、7歳から12歳までの6年間は小学校でここまですべてを初等教育としている。そして、中等教育として義務教育である13歳から16歳までの中学校と、その後2年間の高校がある。中学校と高校を卒業する歳に総合的なテストを受け、進路についてテストの結果が重要になる。大学での学部によって入学を許可する点数が定められている。例えば、医学部に入りたい学生はテストで99.2点を取らなくてはならない。
- ② 障害児教育：障害のある人の生活体系には自宅、入所、グループホームなどがあり、障害児の通常の教育機関への受け入れは現在1%である。又、障害児に対して18歳までの支援、保護義務があり、高校を卒業するまでの教育を保障している。

③ 障害児教育の考え：障害があるために不利な状況におかれなければならないのではなく、個人を尊重し統合的な教育の中で育てていきたい。誰をも同じように受け入れ、教育者側も子どもの障害、症状を含めてよく理解するなど、十分な知識が必要である。その上に統合された教育が成り立つ、つまりノーマライゼーションの理念を大切にされた教育をしている。十分な教育を受ければ誰もが社会の中で生活が出来る。このような社会からの隔離から社会参加へという考えは30年ぐらい前からでてきたことだという。

④ 障害児の進路決定：子どもの進路決定の際、親に強制的な決定権はなく、後見人制度により医者、弁護士、地域の専門家等で構成される後見人の決定により進路が決まる。サポートにより通常教育が可能であるか、他者を傷つける行動がなければ、通常の学校に入学できる。その中で医療が必要な生徒は看護婦が付き添う。

⑤ 保育士、教員免許：大学での4年間で教員免許が取れ、特別な教育分野へ進むものは教員免許取得後に2年間の教育を受けなくてはならない。幼稚園だけならば、教員の勉強を3年と幼児についての勉強を1年受けた後、資格取得となる。

2) 幼児教育に関する施設の種類と概要

1、チャイルドケア施設 (Child Care Centres) の種類と特徴に関して

オーストラリアの教育・福祉に関して、全国をカバーする連邦法は児童福祉法 (Child Care Act) のみであり、障害の有無にかかわらずサービスの提供責任は各州にあり、州独自の法律 (Regulations) が制定されている。ここでは、日本の幼稚園、保育園とを比較してクィンズランド州のチャイルドケアセンターの特徴をあげる。

① Kindergarten：幼稚園：3歳児から就学年齢までの子どもたちの施設。1日6時間以内の保育を行う。日本では、園児全員が毎日通園するが、通園日数は、週2日、3日、4日、5日と様々である。

② Long day care centre：ほぼ日本の保育園にあたる：長時間開いている。政府より保護者の所得に応じてChild Care Benefitと呼ばれる終演補助金が支給される点も似ている。私立と公立があり、クィンズランド州の場合、80%が私立となっている。

③ Limited hours care centre：時間制限のある保育施設：一時期に預かれる子どもの数は、21人を超えてはならない。一人の子どもについて週12時間を超えては預かれない。週20時間以上は開演できない。

④ Occasional care centre：臨時の保育施設：一時期に21人以上の子どもを預かれる。週20時間以上開演している。

2) 教員の種類と資格

教員の種類と資格は、園長 (Director) は、大学の幼児教育コース (日本の大学の幼児教育卒に相当) を卒業していること。クラス担任 (Group leader) は、高校終了後、短大や専門学校など

で2年以上の幼児教育コースを修了 (Diploma)を持つこと。日本の短大や専門学校の保育科、幼児教育卒に相当する。アシスタント (Assistant) は、成人であること、高校を卒業していること。17歳以上でアシスタント資格 (Child care practice certificate) を持つこと。研修制度 (Australian Traineeship Scheme) で幼児教育を勉強中であることのいずれかであること。また、直接子どもたちの保育に関わる先生は、全員、救急法 (First Aid) の資格を取ることが義務づけられている。

3) 幼児教育の4領域と保育指針: 「Quality Improvement and Accreditation System Hand book」による

1, 人との関わり (Interactions) ①スタッフと子どもの関わり (Interactions between staff and children) ②スタッフと両親の関わり (Interactions between staff and parents)

③スタッフ間の関わり (Interactions between staff)

2, プログラム (The program)

3, 栄養、健康、安全の実践 (Nutrition, Health and safety practices)

4, 施設の経営とスタッフの教育 (Centre management and staff development)

この4領域から保育の指針 (Principle) 52項目がある。ここではPrinciple 1～5までをあげる。

Principle 1 スタッフと子どもとの関わりは、親しみに満ちている。

Principle 2 スタッフは、すべての子どもを平等に扱い個々のニーズに応じるように努める。スタッフは、子どもの持つ背景の多様性を尊ぶ。

Principle 3 スタッフは、両性を偏向なく扱う。

Principle 4 スタッフは、指導やしつけに肯定的アプローチをとる。

Principle 5 スタッフは、子どもの感情やニーズに敏感に応える。

4) 保育料と保護者に支給される就園補助金 (Child Care Benefit) : 保育料は、公立と私立によっても違いがある。1日25ドルから40ドルと様々である。一般的には公立の方が安いようである。

永住権、市民権を持つ保護者には、CCB (Child Care Benefit) が支給される。支給額は両親の所得、子どもの通園日数などにより異なる。

5) 給料: スタッフの給料は、州政府の決めた 幼児教育関係者給与 (Childcare Industry Award) によって、週休で支払われる。

VI おわりに

オーストラリアのいくつかの施設を見学し、日本との違いを強く感じた部分は、多文化国家であり、様々な言語と文化背景を持つ子どもたちがどの施設にも在籍していることである。言語1つとっても、家庭で話される言葉は、英語、ドイツ語、フランス語、イタリア語、スペイン語、日本語、中国語、韓国語等50カ国語にも及ぶようである。文化的背景や、個々の家庭的背景に配慮した

スタッフの対応は、日本では予測できない内容と言ってもいいかもしれない。また、契約の国なので、保育時間を過ぎてしまった保育に親は、それ相応のペナルティーを払うようである。

幼稚園で遊ぶ子どもたちの様子を見学すると、色彩の鮮やかさに驚かされる。服や帽子の色使いなど明るく華やかな印象である。私たちが見学したPark Street Childcare Centreでは、この日オーストラリアの原住民であるアボリジニーが来てお話をしてくれた。ただ話をするだけでなく、生活の道具や絵画や写真を見せたり、コディキーという大きな笛のようなものも実際に吹いてくれた。これらを見ると色彩の原点があるように思った。

そして、紫外線が日本の5倍という国のため、庭に出る際は、帽子をかぶり、顔や手足にサンスクリーンと呼ばれる日焼け止めを塗るように指導している。園舎の建築に際してもシェードと呼ばれる日陰部分を作っている。これは子どもの人数に見合うだけ設置するよう義務づけられている。

日本では、毎日園児全員が通園するが、日によって通園する子どもたちがまちまちである。そのためかどうかわからないが、保育は全員が一斉に何かをしようというより個々で自由に遊ぶ姿が見受けられた。

これを機会に今後研修旅行が続けられことを希望する。世界における福祉事情を、学生と共に学べるよう努力していきたい。

<引用参考資料>

- ・ * 「第1回海外研修旅行報告集」植草学園短期大学
- ・ 「オーストラリア幼児教育の概要」クイーンズランド州の教育実践をふまえて 藤国際幼稚園
藤原 一昭
- ・ 「COURSE ON CARE OF CHILDEN WITH DISABILTIES IN AUSTRALIA」DEVELOPED FOR AND PRESENTED TO STUDENTS FROM UEKUSA GAKUEN JUNIOR COLLEGE TAFE